

「三日目に」という必然性の根拠

空知太栄光キリスト教会 銘形 秀則

ベレーシート

●聖書を神の啓示の書として信じている者にとって、「果たして、私たちは聖書を正しく解釈して来たのか」と問いかけることは決して不信仰なことではありません。「使徒の働き」にあるベレヤの教会の人々は「非常に熱心にみことばを聞き、はたしてそのとおりかどうかと毎日聖書を調べた。」(使徒 17:12)とあります。聞いたこと(聞かされてきたこと)を鵜呑みにすることなく、それがどういうことかを知るために、「突っ込み」をかけたリ、確かめたり、検証したりすることは一つの能力だと信じます。ただしその能力は、生来の人間的な能力ではなく、「知恵と啓示の御霊」という神からの賜物です。それゆえ使徒パウロが、「栄光の父が、神を知るための知恵と啓示の御霊を、あなたがたに与えてくださいますように」と祈ったように(エペソ 1:17)、私たちも絶えずその祈りをする必要があります。特に、ヘブル的視点から、あるいは「御国の福音」の視点から聖書を読もうと試みるクリスチャンにとってはなおさらのことです。

●さて、イエシュアが弟子たちに、「あなたがたは、わたしをだれだと言いますか。」という問いかけをした時、弟子の筆頭であるペテロが答えて、「あなたは、生ける神の御子キリストです。」と答えました。するとイエシュアはすかさず、「バルヨナ・シモン(בְּרִינְיָהוּ שִׁמּוֹן) あなたは幸いです。このことをあなたに明らかに示したのは人間ではなく、天にいますわたしの父です。」と釘を刺しています。その時からイエシュアは、エルサレムにおけるご自分の受難と死を弟子たちに語りはじめます。そして、「三日目によみがえらなければならない」ことを教え始められました。ちなみに、共観福音書は、いずれも「必ず~なる」という必然性を意味する「デイ」(δῆϊ)が使われています。また、「三日目に」という部分は以下のように訳されています。

- | |
|--|
| ①マタイ 16章 21節・・・「三日目に」(新改訳・新共同訳) the third day — τῆ τρίτῃ ἡμέρᾳ |
| ②マルコ 8章 31節・・・「三日の後に」(新改訳・新共同訳) after three days — μετὰ τρεῖς ἡμέρας |
| ③ルカ 9章 22節・・・「三日目に」(新改訳・新共同訳) the third day — τῆ τρίτῃ ἡμέρᾳ |

●さて、ここで問題です。なにゆえに、キリストは「**三日目によみがえらなければならない**」のかということです。その必然性を聖書の中から論証しなければならないとするならば、その**聖書的根拠**はどこにあるのでしょうか。その根拠を、単に、神の摂理だからといった曖昧なことばではその必然性を論証したことにはなりません。聖書の中からその必然性が論証されなければならないのです。なぜなら使徒パウロも、Iコリント 15章 1~で、以下のように記しているからです。下の黄色の部分に注目してください。「聖書の示すとおりに」は、「聖書に従って」と訳せます。いずれも「カタ・タス・グラフィス」(κατὰ τὰς γραφάς)です。

【新改訳改訂第3版】Iコリント 15章 3~4節

3 私があなたがたに最もたいせつなこととして伝えたのは、私も受けたことであって、次のことです。キリストは、**聖書の示すとおりに**、私たちの罪のために死なれたこと、

4 また、葬られたこと、また、**聖書の示すとおりに**(第二版までは「聖書に従って」と訳されていました。)、

三日目によみがえられたこと、(・・・です。)

●しかも、「**聖書の示すとおりに**」の「聖書」とは「旧約聖書」のことです。コリントの手紙が書かれた時点では、まだ新約聖書は書かれていません。ユダヤ人たちは旧約聖書とは言わず、「トーラー」「ネーヴィーム」「ケスヴィーム」の頭文字を取って、「タナフ(TANAKH)」と言います。その「タナフ」の示すとおりに、イエシュアが受難のメシアとして「私たちの罪のために**死なれること**」は旧約に預言されていました(イザヤ 53 章)。そして、「死から**よみがえられること**」も旧約のダビデによって預言されていたのです(詩篇 16 篇参照)。ただし、そこにはいずれも「三日目に」ということばは預言されていません。

●このメシア・イエシュアの死と復活の事実こそが福音であり、その事実に対する信仰に堅く立って続けるならば、だれでも救われることができるのです。「十字架の死と復活」が強調されるのはそのためです。ただし正確には、「死と埋葬、そして復活と顕現」という四つの出来事が含まれているのです。それを省略して、私たちは「十字架の死と復活」としているのです。これが原始教会の信仰でした。

●礼拝の中で使徒信条を告白している教会であるならば、「我は天地の造り首、全能の神を信ず、我はその独り子、我らの主、イエス・キリストを信ず。主は、・・・ポンテオ・ピラトのもとに苦しみを受け、十字架につけられ、死にて葬られ、陰府にくだり、**三日目に**死人のうちよりよみがえり・・・」というフレーズを毎週、告白しているわけです。しかし、その中にある「三日目に」という必然性を聖書から正しく理解しているのかどうかは別のことです。むしろ、「三日目に」を死んで、そこからよみがえるまでの期間としての「三日目に」として理解しているのではと思います。なぜ「三日目」なのか。事実としては認めても、なぜ「三日目」なのかというその必然性に疑問を抱く人はほとんどいないのではないかと思います。実はこの私もその一人でしたが、最近になって、「三日目に」の必然性に気づかされたのです。そのことをお話しするまえに、「三日目に」というこれまでの解釈を先に紹介したいと思います。

1. 「三日目に」の「三」という数の落とし穴

●なにゆえに、「三日目によみがえられなければならない」のかという質問に対して、多くの方が、「三日目に」の「三」という数にこだわってしまうようです。なぜなら、聖書の中に、「三日三晩」「三日目に」「三日目のために」という言葉があるからです。たとえば、以下のような聖書箇所がその例です。

(1) 「三日三晩」(ヨナ書 1 章 17 節～2 章 10 節)

●預言者のヨナが神に逆らったために海に投げ出されます。そしてヨナは大きな魚に飲み込まれてしまいます。三日三晩、大きな魚のよみの腹の中でヨナは神に叫び、悔い改めました。すると主なる神はヨナを陸地に吐き出させたことから、この出来事がキリストの死と復活の予表として解釈します。

(2) 「三日目に」(創世記 22 章 4 節)

●アブラハムは、イサクを全焼のいけにえとして神にささげよとの命令に従ってモリヤの山(=エルサレム)に出

かれます。そして、三日目に、アブラハムが目を見ると、その場所がはるかかなたに見えたことが創世記 22 章に記されています。家を出発してから、実際にイサク(実際は神が身代わりとしての雄羊を備えていたのですが)をささげるまでは、イサクはいわばすでに死んだ者であり、三日目にイサクを死者の中から取り戻したよみがえりの型として解釈します。

(3) 「三日目のために」(出エジプト記 19 章 11 節)

●シナイ山において主ご自身が自ら神の民の前に現われるそのための準備の期間としての「三日目」ということから、主のよみがえりによる顕現(現われ)までの期間の予表として解釈します。

(4) 「三日で」神殿を建てる(ヨハネの福音書 2 章)

●ヨハネの福音書の 2 章には、カナでの婚礼で水がぶどう酒に変わるというしるしの後に、イエシュアが最後にエルサレムを訪れた時に大胆な宮きよめの行動を起こしたために、ユダヤ人から「あなたがこのようなことをするからには、どんなしるしを私たちにを見せてくれるのですか」という問いに答える形で、「この神殿をこわしてみなさい。わたしは、三日でそれを建てよう。」とイエシュアが言ったことばが記されています。建てるのに 46 年かかった神殿を「三日で建てよう」とイエシュアが語ったことにユダヤ人たちは驚きました。神殿とはイエシュア自身のからだのことを言われたとヨハネは記しています。ここでの三日は、共観福音書の受難と復活の告知のヨハネ版と考えることができますが、「三日で」の必然性は語られてはいません。

(5) 「三」という数

●聖書の神は三位一体であるために、「三」という数を象徴的な数として考える解釈です。たとえば、ヘブル語で「父」を「アーヴ」(אָב)と表記しますが、「アーレフ」と「ベート」の二文字を数値に換算すると、 $1+2=3$ となります。このように考えると、「三」は父なる神、あるいは父と子のかかわりの象徴数と解釈されますが、それが「三日目によみがえらなければならない」という必然性の聖書的根拠とするには一考を要します。一考を要すると言ったのは、「三」という数が神を示す神聖な数だからです。とはいえ、優先すべきことは常に真理であり、数字はそれを二義的に補足するものでなければなりません。

(6) その他

●死んだことが明確にされるための「三日」という考え方があります。しかし、イエシュアの死が本当の死であったことを確証するのは、三日を待つまでもなく、「葬られたこと」で十分です。ちなみに、ラザロの場合は「四日目」によみがえりました。四日も経てば肉体が腐って、ラザロが死んだことをだれもが認めるはずです。

●ホセア書 6 章 2 節に「主は二日の後、私たちを生き返らせ、三日目に私たちを立ち上がらせる」とありますが、ここの文脈的な意味としては、「ほんのわずかな期間に」という意味で、北イスラエルの民の安易な誠実を「朝もやのようだ。朝早く消え去る露のようだ。」として主は非難しています(ホセア 6:4)。

●以上(1)~(6) まで、「三日目によみがえらなければならない」ことの必然性を示すものとして考えられていることを列挙しました。「三日目」の必然性を予表や型として示してはいます。しかし納得できる決定的な必然性には至っていないように思われます。

2. 「三日目に」という聖書的必然性

●パウロが「聖書が示すとおり、三日目によみがえられたこと」(I コリント 15:4)とあるように、「三日目に」の根拠は旧約聖書の中に啓示されてきたことが分かります。

ところで、ここであるナゾナゾを紹介しましょう。「野菜を満載した車がある角を曲がろうとしたとき、何かを落としました。いったい何を落としたのでしょうか。」・・・答えは、「〇〇〇〇」です。「野菜」ということばに気を取られてしまうとこのナゾナゾは解けません。「三日目に」ということばも実は同様です。「三日」あるいは「三」という数字に気を取られると分からないのです。

●ズバリ、設問の「三日目によみがえらなければならない」というその必然性とは、イエシュアによみがえりが「初穂」となるという預言的啓示にあります。イエシュアによみがえりが「初穂」であるということは、やがてイエシュアを信じる人々がイエシュアの再臨される日に、多くの者たちが死からよみがえることの保証を意味しています。レビ記 23 章は主の例祭について記されている重要な箇所です。その一つに、「**初穂の祭り**」があるのです。

●右図にある「過越の祭り」は一日だけの祭りですが、その後「種なしパン(種の入らないパン)の祭り」は七日間続きます。そして「初穂の祭り」が、「過越の祭り」の後に来る「安息日」の翌日、すなわち、週の第一日目に人々はその春に収穫された大麦の初穂の束を祭司のところにもって行き、祭司はその束を振って主にささげます。この初穂の祭りは「種の入らないパンの祭り」の中で行われますが、必ず、安息日の翌日だということなのです。

●ところで、イエシュアが弟子たちにエルサレムでの受難と復活の予告を話し始めたのは、イエシュアが「過越の祭り」で十字架にかかる一年前の春から夏にかけてのことでした。ですから、そのときには翌年の「過越の祭り」が週の第何日目かを当然知っていたはずで、イスラエルの民にとっては重要な関心事なので、

●「過越の祭り」と「種の入らないパンの祭り」は必ずしも週の第〇日目という特定された日ではなく、その年によって変化します。しかし、「**初穂の祭り**」は必ずその週の安息日の翌日である週の第一日目と決まっています。ですから、当然、イエシュアは自分の苦難と死を迎える年の過越の日と「初穂の祭り」には三日を要することを知っていたはずで、これが「三日目によみがえらなければならない」という「三日目」の必然性です。イエシュアの「よみがえり」の日は、「初穂の祭り」の日と重なるのでなければならなかったのです。「初穂の祭り」と初穂としてのイエシュアによみがえりの日が重なるためには、死んだ日を含めた「三日目」だったので、

主の例祭は、神の不変のご計画(マスタープラン)を正確に啓示しています。それゆえ、「聖書が示すとおり」(I コリント 15:4)となるのです。



春の祭り **メシアの初臨において成就**

- ① 過越祭
- ② 種を入れないパンの祭り(出 23:15)
- ③ 初穂の祭り—
- ④ 五旬節(シャブオット)
—初穂の祭りから 50 日後の日曜日)

秋の祭り **メシアの再臨において成就**

- ⑤ ラッパの祭り—第 7 月の第一日—
- ⑥ 贖罪の日
- ⑦ 仮庵祭



●ちなみに、イエシュアの復活した日が「週の初めの日」であったことを共観福音書は強調しています。なぜなら、その日は「初穂の祭り」であることが背景にあったからです。その箇所を見てみましょう。

●マタイの福音書 28章1節

「さて、安息日が終わって、週の初めの日の明け方、マグダラのマリヤと、ほかのマリヤが墓を見に来た。」

●マルコの福音書 16章1～2節

「さて、安息日が終わったので、・・・は、イエスに油を塗りに行こうと思い、香料を買った。そして、週の初めの日の早朝、日が上がったとき、墓に着いた。」

●ルカの福音書 24章1節

「週の初めの日の明け方早く、女たちは、準備しておいた香料を持って、墓に着いた。」

ベアハリート

●以上、「三日目に」という言葉が、何を意味しているのなかなか気づかないのにはそれなりの理由があります。それは私たちが聖書を解釈する上できわめて重要な神のマスタープランを啓示しているユダヤ的・ヘブル的ルーツが長い間断ち切られてきたからです。「御国の福音」を正しく理解して告知させるためには、ユダヤ的・ヘブル的ルーツを取り戻す必要があるのです。そして長い間隠されてきたことを探し出して、神のご計画(マスタープラン)が確実に実現していくことをより明らかにすることだと信じます。

【新改訳改訂第3版】I コリント 15章19～23節、50～52節

19 もし、私たちがこの世にあってキリストに単なる希望を置いているだけなら、私たちは、すべての人の中で一番哀れな者です。

20 しかし、今やキリストは、眠った者の初穂として死者の中からよみがえられました。

21 というのは、死がひとりの人を通して来たように、死者の復活もひとりの人を通して来たからです。

22 すなわち、アダムにあってすべての人が死んでいるように、キリストによってすべての人が生かされるからです。

23 しかし、おのおのにその順番があります。まず初穂であるキリスト、次にキリストの再臨のときキリストに属している者です。

50 兄弟たちよ。私はこのことを言うておきます。血肉のからだは神の国を相続できません。朽ちるものは、朽ちないものを相続できません。

51 聞きなさい。私はあなたがたに奥義を告げましょう。私たちはみな、眠ることになるのではなく変えられるのです。

52 終わりのラッパとともに、たちまち、一瞬のうちにです。ラッパが鳴ると、死者は朽ちないものによみがえり、私たちは変えられるのです。

●ヘブル語で「からだ」のことを「バーサール」(בִּשְׂרָר)と言いますが、この動詞の「バーサル」(בִּשְׂרָר)は「良い知らせを告げ知らせる」という意味を持っています。朽ちないものによみがえって、新しいからだに変えられた「初穂」としてのイエシュアは、主を信じる者にとってまさに最高の「良い知らせ」(福音)です。それは「走ってもたゆまず、歩いても疲れぬ。新しい力を得て、鷲のように翼をかって上ることができる」(イザヤ 40:31)世界です。そのような「御国の福音」を語り告げながら、主の来臨を待ち望みたいものです。

「五千人の給食」と「四千人の給食」の奇跡に見る

「御国の福音」のヴィジョン

銘形 秀則

ベレーシート

- 共観福音書において、イエシュアの公生涯の最初の宣教メッセージは以下の通りです。

「悔い改めなさい。天の御国が近づいたから。」(マタイ 4:17)

「時が満ち、神の国は近くなった。悔い改めて福音を信じなさい。」(マルコ 1:15)

この二つを合わせるなら、「天の御国」と「神の国」は同義であること。そして、「悔い改める」こと、すなわち、神に立ち返ることによって、神の支配(統治)による良きおとずれ(福音)を信じるといふものでした。イエシュアの言動のすべては、「天の御国」、あるいは「神の国」に関するものでした。

(1) 「御国の福音」への気づき

- 神の導きは私たちの思いや考えを越えて働いています。特に、重要な事柄への導きは時にはいつから始まったのか、明確ではないこともしばしばです。2014年2月の連盟牧師会での「霊性の回復セミナー」を準備する中で、私は使徒の働き 20章から、「**神の恵みの福音**」と「**御国の福音**」があることに気づかされたので、そのことを扱いました。「神の恵みの福音」は「**和解の福音**」とも「**十字架の福音**」「**赦しの福音**」とも呼ばれますが、「御国の福音」については私は盲目でした。前者と後者の区別がつかず、ごっちゃまぜになっていたのです。

- 「置換神学」と「個人的救いの強調」の弊害を感じながら、ヘブル的視点から聖書を横に読み続けてきました。その間、不思議な出会いを数多く経験しながら導かれてきましたが、混乱の原因の一つとして、伝道至上主義の持つ聖書理解もひとつの理解の型紙となっていることに気づき始めました。初代教会の福音の理解、そして使徒パウロの福音には二面性があること、つまり、「御国の福音」の中に「神の恵みの福音」が位置づけられていることに気づき始めました。福音を伝える上で重要なのは、個人の体験、個人の信仰のあかしです。これはイエシュアの十字架の恵みの福音のもつ性格です。罪の赦しの確信、神の子どもとされた確信、自分中心ではなく神中心の生き方をもたらす神の愛と恵みの経験を目に見える形に、すなわち、生き方であかししていく必要に迫られるのです。しかし、「御国の福音」の特徴は体験をあかしできないことです。これは神の約束を信じることであり、しかも独りよがりではなく、聖書によって論証することが求められます。使徒パウロは、エペソの教会を建て上げて行く上で、「神の恵みの福音」をあかしすると同時に、「御国の福音」を語り続けました。しかも、「余すところなく」とあります。

【新改訳改訂第3版】使徒の働き 20章 24～27節

24 けれども、私が自分の走るべき行程を走り尽くし、主イエスから受けた、神の恵みの福音をあかしする任務を果たし終えることができるなら、私のいのちは少しも惜しいとは思いません。

25 皆さん。御国を宣べ伝えてあなたがたの中を巡回した私の顔を、あなたがたはもう二度と見ることがないことを、いま

私は知っています。(※「御国」を「御国の福音」と訳すこともできます。)

26 ですから、私はきょうここで、あなたがたに宣言します。私は、すべての人たちが受けるさばきについて責任がありません。

27 私は、神のご計画の全体を、余すところなくあなたがたに知らせておいたからです。



●パウロほどに神の恵みの豊かさをあかしした人はいません。そして「この恵みが与えられたのは、キリストの測りがたい富を異邦人に宣べ伝える」ためであると、その使命を自覚していました。自分に対する救いも、罪の赦しも、いやしも働きも、すべて神の恵みとして経験したことを彼はあかししています。と同時に彼は、長い間隠されてきた「御国の福音」の奥義を啓示された人でもあります。

●キリスト教会は主にある一人ひとりに対して、自分が経験した神の恵みの福音をあかしする(testifying)ことを心掛けさせてきたと思います。単なる知識ではなく、生きたあかし人となることを勧めてきました。それは正しいことであり、間違っていないと思います。しかし見落としてきたものがあるのです。それが「御国の福音」を宣べ伝え(preaching)、教え伝える(teaching)ということです。

(2) 「御国の福音」は神のご計画全体におよぶ

●しかし、「御国の福音」は、27節に示されているように、「神のご計画全体」におよぶ鳥瞰的な内容を含んでいます。しかもパウロは、それを「余すところなく知らせておいた」と述べています。「余すところなく」と訳されたギリシア語は「退く、ひるむ、避ける」という意味の「ヒュポステッロー」(ὑποστέλλω)と、それを否定することばで表現しています。難しいという理由で、語ることを「ひるんだりはしない」と言っているのです。この視点が聖書の正しい理解を支えて行きます。見知らぬ地でも地図をもって歩くことになるので、自分の思いや判断で迷路に入ったりする失敗が少なくなるのです。

●パウロのいう「御国の福音」は、イエシュアがイスラエルの民に向けて語った福音です。この福音は、旧約のアブラハム契約、モーセ契約、ダビデ契約など、また預言者たちが語ったように、「終わりの日」にメシアによって実現する神の統治(支配)の到来によって実現し、完成する福音です。しかもそれはこの地上において目に見える形で実現します。「御国の福音」は、イエシュアの再臨によって実現する「メシア王国」(千年王国)であると同時に、次のステージをも含んでいます。つまり、黙示録 21～22章に描かれているような永遠の御国(新しいエルサレム)が備えられています。前置きが長くなりましたが、このような「御国の福音」の視点から、今回「五千人の給食」と「四千人の給食」の奇跡を取り上げたいと思います。あるいは、タイトルとして挙げたよう

に、「五千人の給食」と「四千人の給食」の奇跡に隠された「御国の福音」のヴィジョンを提示してみたいと思います。

●なぜ、似たようなこの二つの奇跡が記されているのか。なぜ、「五千人の給食」が先で、「四千人の給食」が後に置かれているのか。こうした疑問を「御国の福音」の視点から考察してみたいと思います。

1. 五千人の給食が示唆していること

●「五千人の給食」の奇跡にある「五つのパンと二匹の魚」は有名です。貧しいながらも、それを主に差し出すことで奇跡的な神のみわざがなされるという意味で解釈されることが多い箇所です。こうしたメッセージは、教会の会堂建設や何かのプロジェクトを進める場合の励ましのメッセージとしては都合の良い解釈です。各自の賜物を活かし合うことで予想をはるかに超えた神のみわざを見ることがしばしばあるからです。確かにそうしたメッセージは聖書の中にあることも事実ですから、間違っていないと思います。しかし、この二つの奇跡を「御国の福音」という視点から見れば、また別の解釈が可能なのです。

●神田満師は現在、空知太栄光キリスト教会の礼拝において、ヨハネの福音書を講解説教してくれています。回を追うごとに新しい数々の発見を提示してくれていますが、一年程前に、「五千人の給食」を扱った時に私は驚かされました。それは今までにない光が差し込んだからです。それはイエシュアが言ったことばです。

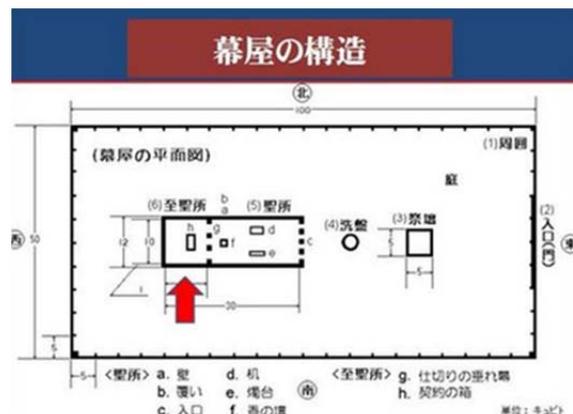
『人々をすわらせなさい。』その場所には草が多かった。そこで男たちはすわった。その数はおよそ五千人であった。』

(ヨハネ 6:10)

●この部分の並行箇所であるマルコの福音書には、人々が百人と五十人の組になって席に着いたとあります。

『イエスは、みなを、それぞれ組にして青草の上にすわらせるよう、弟子たちにお命じになった。そこで人々は、百人、五十人と固まって席に着いた。』 (マルコ 6:39~40)

●なぜ、百人と五十人なのか。これは 2:1 の比率で、しかも $100 \times 50 = 5000$ (人)となります。「すわった」、あるいは「席に着いた」ということばをヘブル語にすると「ヤーシャヴ」(יָשַׁב)で、「座る、とどまる、住む」を意味します。これが主を中心にして座るとなると、これはモーセの幕屋における神との交わりを想起させます。モーセの幕屋は、神とイスラエルの民が交わるために神が設計された天のコピーです。北と南は 100 キュビト、東と西は 50 キュビトです。幕屋における礼拝を通して、人々は神から与えられるパンを食べていのちを得、満足するのです。この「五千人の給食」の奇跡が示唆しているのは、**メシア王国における祝福**です。しかも、余ったパン切れを集めると 12 のかごがいっぱいになったのです。



●「12」という数には特別な意味があります。それは神が切望し、喜びとされる数です。メシア王国(千年王国)においては、神と人々がシオンにおいて神との交わりを楽しみますが、詩篇 132 篇 13 節に「主はシオンを選び、それをご自分の**住みか**として**望まれた**。『これはとこしえに、わたしの安息の場所、ここにわたしは**住もう**。わたしがそれを**望んだ**から。』とあります。「住みか」は「ヤーシャヴ」の名詞化されたものです。「住もう」も同じく「ヤーシャヴ」です。そして「望まれた」「望んだ」と

訳されたヘブル語は「アーヴァー」(אִוְוָא)です。この「アーヴァー」のゲマトリアが $1+6+5=12$ なのです。神のこだわりの数である **12** は、神が望まれ、喜びとされる数なのです。まさに、「12のかご」はメシア王国における神と人との食卓の喜びを表していると言えます。

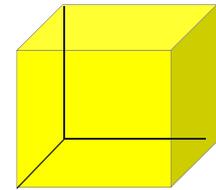
2. 四千人の給食が示唆していること

●五千人の給食における「五千」という数は 100×50 という数で、あまりにもスッキリしています。しかし、四千人の給食はどうでしょう。「四千」という数をどのように説明することができるでしょうか。それを解明することは、実は「五千」よりも難しいのです。私は四千という数を思い巡らしているうちに、この四千という数字は

4×1000 だという思いが来ました。直感です。

●**4=至聖所と同様に立方体**、比率は 1:1 です。その辺の数は 12 です。

$12 \times 12000 = 144000$ この数は神によって贖われたすべての者の象徴的な数だと考えられます。つまり、イスラエルの 12 の部族から贖われたすべての者の象徴数でもあり、かつ新しいエルサレムにおける贖われた者の象徴数でもあるということです。

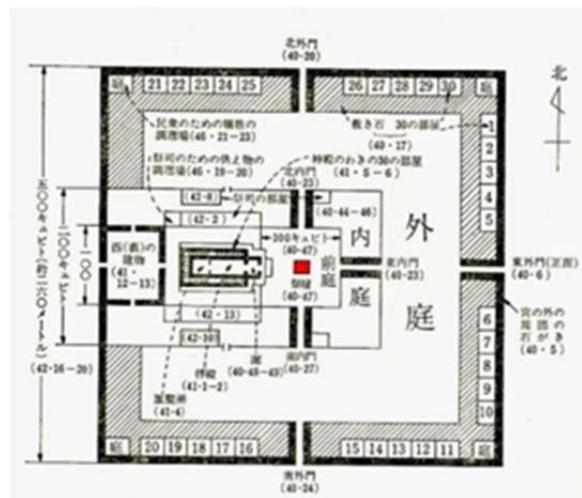


● $1000 = \text{アーレフ} = \aleph$ 「アーレフ」は 二つの「ヨッド」(י)と一つのヴァヴ(ו)からなっており、このゲマトリアは $2 \times 10 + 6 = 26$ です。これは「ヤーウエ」(יהוה)のゲマトリア($10+5+6+5=26$)と同数です。つまり、「アーレフ」は「主」ご自身を表わす数字でもあります。

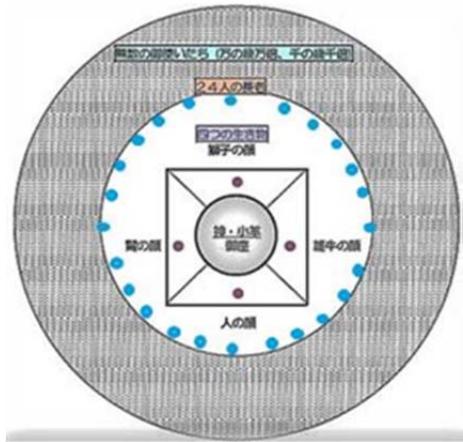
● $4 \times 1000 = 4000$ の 1000 はメシア王国の「千年」という期間であると同時に、

- ①「完全」(Perfect, Full)を意味するヘブル語「トーム」(טוֹם)のゲマトリア、すなわち、 $400 = \text{ת}$ (ターム)、 $600 = \text{מ}$ (MEM・ソフィート)と解せます。
- ②「終結」(End)を意味するヘブル語「ケーツ」(קֵץ)のゲマトリア、すなわち、 $100 = \text{ק}$ (コフ)、 $900 = \text{צ}$ (ツァーデー・ソフィート)とも解することができます。

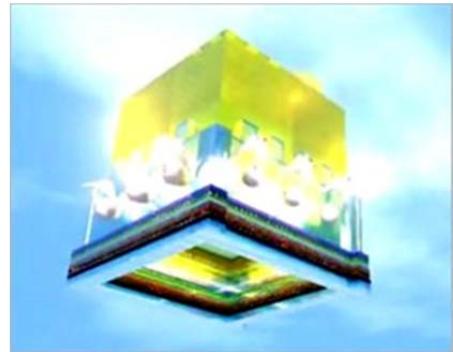
●4000 はエゼキエル書 42 章にあるメシア王国における主の神殿全体を表わしています。これはモーセの幕屋とは異なります。むしろ、**モーセの幕屋を内包した天にある「新しいエルサレム」の模型**と言えます。エゼキエル書 42 章の神殿全体は一辺が 500 キュビトからなる正方形です。これは天における御座のコピーと言えます。ヨハネの見た天の御座には四つの生き物(各四つの方向にひとつずつ)と 24 人の長老がいます(黙示録 4 章)。



●やがて天から降りてくる**新しいエルサレム**は一辺が 12000 スタディオンからなる立方体。エゼキエルの神殿全体の一辺は 500 さお。この数に 24 を掛けると 12000。24 という数字は、12+12 で、イスラエルの 12 部族と教会の 12 使徒の数の和です。12×12=144 144000 人(144×1000)という数も関係があるように思われます。いずれにしても、144000 は、神に贖われたすべての民の象徴数です。



●数における単位はそれほど関係がないようです。要は数そのものに意味があります。つまり、12000 スタディオンを 2220km に変換しても意味がないということです。



ベアハリート

●「四千人の給食」に秘められた奥義とは、やがて神のマスタープランにおけるメシア王国での神殿、および新しいエルサレムの立方体を意味し、それは世界の四方から集められた 12 部族のイスラエルの民と 12 使徒を中心とするキリストの花嫁を表わし、神と人(新しい人=ユダヤ人と異邦人)とが共に住む永遠の家を意味していると考えられます。しかも、そこに「7」という数字があるのは、神のご計画が完全に成就することを意味します。神の永遠の安息を意味する完全数なのです。

●なぜ、福音書には、「五千人の給食」の奇跡と「四千人の給食」の奇跡が記されているのか。なぜ、「五千人の給食のしるし」が先で、「四千人の給食のしるし」が後なのか。それは、神のマスタープランにおいて現わされる啓示の順序に基づくものであり、後の方がより究極的啓示だからと言えます。

●「五千人の給食」の奇跡はメシア王国における神の食卓のしるしです。旧約の主の幕屋(2:1 の比率)を意味し、そこから、50×100=5000 という人数の意味を解釈できます。パンの 5 という数は旧約のモーセ五書を意味しているのかも知れません。しかし「四千人の給食」の奇跡は、メシア王国、および神のヴィジョンにおける最終ステージである新しいエルサレムの永遠の神の住まい(1:1 の比率を持つ立方体)を重ねるように形で示唆していると考えられるのです。イエシュアがなされたすべての奇跡とすべての教えは、すべて「御国の福音」に関する事柄であることを常に念頭において解釈されなければならないのです。それぞれの時代が要求する「時代的精神」を取り入れて解釈されてはならないのです。

- 「五千人」の給食のしるし
 - マタイ 14 章、マルコ 6 章、ルカ 9 章、ヨハネ 6 章・・・ **モーセの幕屋が啓示していたメシア王国**
- 「四千人」の給食のしるし
 - マタイ 15 章、マルコ 8 章・・・・・・・・・・・・・・・・・・ **新しいエルサレムという永遠の神の幕屋**

アブラハム、ダビデ、イエシュアに共通している事柄とは何か

空知太栄光キリスト教会 銘形 秀則

ベレーシート

- 新約聖書の冒頭、マタイの福音書の1章1節には「アブラハムの子孫、ダビデの子孫、イエス・キリストの系図」とあります。そこに登場する三人の人物に共通する事柄は何かと問われた時、何と答えるでしょうか。おそらく悩まれるのではないかと思います。聖書をある程度学んでいる人であるなら、「契約」と答えるかもしれません。アブラハム契約、ダビデ契約、そしてイエシュアによる新しい契約です。これはすばらしい答えです。しかしこれらの契約がどの部分において共通するのか問うたとしたらどうでしょうか。この答えは神のご計画全体について学んでいないと答えられない問題です。しかし、聖書はその冒頭において、神のご計画がいかなるものであるかをこの三人の人物によって示唆しているのです。
- この三人の人物に共通する事柄とは何か。結論を先に言うならば、その答えは「エルサレム」です。それが神のみこころの鍵であり、神のこだわりです。「エルサレム」というその名称の中に「神のご計画のヴィジョンとその成就」が象徴的に表わされているからです。このことをこれから論証してみたいと思います。

1. アブラハムとエルサレム

●神から「わたしが示す地へ行きなさい。」(創世記 12 章)と召し出されたアブラハムが、信仰によって義とされる(同 15 章)前に、彼はエラムの王ケドルラオメル軍を破り、甥のロトとその家族、そして彼らの財産を取り戻したとき、いと高き神の祭司であったシャレムの王メルキゼデクを通して神の祝福を受けました(同 14 章)。そしてアブラハムはそのメルキゼデクに対して戦利品の十分の一を彼にささげました。その出来事が意味することを私は長い間、悟ることができませんでした。なぜかと言えば、神のご計画の中心に「エルサレム」というキーワードがあることを私は知らなかったからです。

●創世記 14 章でアブラハムを祝福した「シャレムの王メルキゼデク」という人物は、「シャレム」、つまり「エルサレム」の王であり祭司です。ヘブル人の手紙 7 章によれば、彼は「父もなく、母もなく、系図もなく、その生涯の初めもなく、いのちの終わりもなく、神の子に似た者とされ、いつまでも祭司としてとどまっている」と紹介されています(ヘブル 7:3)。そのような人物はとても珍しいというか、この世ではあり得ない存在です。受肉前のイエシュアが旧約時代において何度かこの世に登場しているとも考えられます。今回はそれについて学ぶことはしませんが、そのような存在がイスラエルの歴史の中に登場していることは紛れもない事実です。聖書箇所だけを記しておきます。

(1) シャレムの王であり、祭司のメルキゼデク・・・・・・・・・・・・・・・・・・創世記 14 章

(2) アブラハムを訪れた三人の中のひとり・・・・・・・・・・創世記 18 章

(3) エリコを前にして、ヨシュアの前に現われた抜き身の剣を持った主の軍の将・・・・ヨシュア記 5 章

●ここに共通していることは、登場した人物が礼拝を受けているということです。御使いならば、御使いが礼拝されることを拒否するはずですが、ここに登場した存在はいずれも、アブラハムから、そしてヨシュアから礼拝を受けた存在であるとすれば、それは受肉前のイエシュアでしかないのです。

●さて、アブラハムの生涯において、エルサレムと関係するのは創世記 14 章の他に、22 章があります。そこには神がアブラハムを試練に合わせた出来事が記されています。その試練とは、「あなたの子、あなたの愛しているひとり子イサクを連れて、モリヤの地に行きなさい。そしてわたしがあなたに示す一つの山の上で、全焼のいけにえとしてイサクをわたしにささげなさい。」というものでした。アブラハムは神の命令に従いますが、神がアブラハムに示されたモリヤの地の「一つの山」こそ「エルサレム」でした。



2. 「エルサレム」という名称に隠された神の秘密

●さて、ユダヤ人にもクリスチャンにも多くの影響を与えたユダヤ人のラビの一人、アブラハム・ヨシュア・ヘシエル(1907~1972)という方がいます。その著書「イスラエルー永遠のこだまー」(1996 年、ミルトス社)に書かれているヘシエル氏の見解は以下の通りです。

町の名エルシャライムには、どんな意味があるのだろうか。この町は初めシャローム(サレム)ー平和(創世記 14:18)と呼ばれていたが、後にアブラハムがエレと名づけた。「これにより、人々は、今日もなお『山の上にヴィジョンあり』と言う。」(創世記 22:14)。エルシャライムは、この両方の名をつなげたものだ。エルとシャローム、「ヴィジョン」と「平和」・・・



●ここで私が驚いたのは、創世記 22 章 14 節の訳を「山の上にヴィジョンあり」としていたことです。〔※注〕「エル」(イエル)を「ヴィジョン」と解釈していることです。なぜそのような解釈ができるのか。ここからは私の推論です。つまり、「イエル」の語源を「見る」という意味の動詞「ラーアー」(ראה)としているということです。原文は「アドナイ・イルエ」。

●創世記 22 章と言えば、アブラハムの最大の試練が記されている有名な箇所です。神から「あなたの子、あなたの愛しているひとり子イサクを連れて、モリヤの地に行きなさい。そしてわたしがあなたに示す一つの山の上で、全焼のいけにえとしてイサクをわたしにささげなさい」と命じられて、アブラハムは神がお告げになった場所、すなわち「モリヤの地」に出かけました。4 節に「三日目に、アブラハムが目を見ると、その場所がはるかかなたに見えた(「ラーアー」ראה)とあります。アブラハムと一緒に出掛けた息子のイサクは父に尋ねます。「火とたきぎはありますが、全焼のいけにえのための羊は、どこにあるのですか」と。その問いに対して父アブラハムは、「神ご自身が全焼のいけにえの羊を備えて(原文は「見つけて」ראה)くださるのだ」と答えます(8 節)。

モリヤの地にある一つの山に着いて、アブラハムが息子のイサクをほふるうとしたとき、主の使いが天から彼を呼び、「手を下してはならない」と止め、アブラハムが神を恐れていることを確認しました。アブラハムが目を上げて「見る」(「ラーアー」 אָרָא)と、そこには角をやぶにひっかけている一頭の雄羊がいたのです。そこでアブラハムは、その場所を「アドナイ・イルエ」と名付けました。そこで今日でも「主の山の上には備えがある」(14節)と言い伝えられているとあります。直訳的には「主の山において見られる」です。つまり、「主の山」には「ヴィジョンがある」という解釈です。これが「エルサレム」の「エル」の意味です。

●「エル」は「神」を意味する「エール」(אֵל)ではありません。また「町」を意味する「イール」(עִיר)でもありません。多くの方がそのように理解して、エルサレムを、「平和の神」とか「平和の町」と理解していますが、それは「イエルー・シャーライム」(יְרֵחוֹ)のヘブル語表記を見るなら、頭文字の綴りが異なるのですから、一見して正しくないことが分かるはずで、そして「エルサレム」の後半の部分である「サレム」は、動詞の「実現する、成就する、完成する」ことを意味する「シャーレーム」(שָׁלַם)、あるいは、神の祝福の総称を意味する名詞「シャーローム」(שָׁלוֹם)(その複数形は「シャーライム」שָׁלוֹם)から由来しているとも言えます。つまり、「エルサレム」という町(都)の名称に秘められているのは、主の山に「神のご計画のヴィジョンとその完成がある」、そしてそこに「神のすべての祝福が究極的に実現する」ということなのです。ヘシエル氏の見解は、エルサレム(イエルー・シャーライム)が神の聖なる歴史における究極の場であり、神の永遠のマスタープランにおける重要な鍵語であることを示唆していると言えます。

●さらに、創世記 22 章には「愛する」という動詞が聖書で初めて登場します。「愛する」というヘブル語は「アーハヴ」(אָהַב)です。この「アーハヴ」の三つの文字の第一音と第三音を結びつけると「アーヴ」(אָב)となり、それは「父」を意味します。しかし、父の存在は子の存在なしにはあり得ません。つまり、ヘブル文字の「アーレフ」(א)は、子を意味する「ベーン」(בֵּן)、あるいは息子を意味する「バル」(בַּר)の存在を通してしか、自己存在を示現することができません。御父と御子は常に密接な関係にあります。しかも「アーハヴ」の真ん中にある「ヘー」(ה)という文字のデザインには、「窓」「見る」という象形的な意味があり、全体を合わせると、「アーハヴ」(愛する)とは、同じ窓から同じヴィジョンを共に見るという意味になります。つまり、父と子が同じ窓から同じものを見、同じヴィジョンを見ているという意味になります。しかも、創世記 22 章にはアブラハムとイサクが、「火とたきぎはあっても、全焼のいけにえがない」という異様な雰囲気の中で、「ふたりはいっしょに進んで行った(歩き続けた)」(6, 8 節)とあります。

●このように、「愛する」ということは父と子が同じ窓から同じものを見、同じヴィジョンの完成を見ているだけでなく、たとえそれがどんな困難なことであっても、犠牲を伴うことであっても、それを実現しようと二人がいつもいっしょにいる(進む、歩く)ということなのです。

●これがヘブル語の「愛」だとすれば、私たちの知っている愛の概念が全く変わってきます。聖書の「愛」の関係は、共に神のご計画(ヴィジョン、マスタープラン)を実現するために、いつもいっしょに歩み続ける関係だからです。この「愛」のかかわりが果たしてアブラハムとイサクに見られるかどうか、その点を問われたのが創世記 22 章における試練だと信じます。ちなみに、ヘブル語の「アーハヴ」(אָהַב)の概念を正しく理解するなら、イエシュアがペテロに対して「わたしを愛するか」と三度問われた「愛する」という動詞がギリシア語の「アガ

パオー」か「フィレオー」かといったことは、それほど重要な問題ではなくなってしまうのです(ヨハネ 21:15～17)。

●創世記 22 章におけるアブラハムとイサクの愛のテストは、父と子が同じヴィジョンを見、それを実現するために二人がいっしょに歩み続けることができるかどうかでした。その意味では、「主の山の上には備えがある」という訳は意識(もしくは誤訳)なのです。神に従うなら神は必ず必要なものを備えてくださるというメッセージは、この箇所では語られていないと言えます。むしろ、主が示される一つの山、すなわち、「エルサレム」は神のヴィジョンが完成するところであり、神がアブラハムに約束したすべてのことが完全に成就するところなのです。それはメシア王国において実現し、神のご計画の最後のステージである「永遠の御国」における「新しいエルサレム」において完全な姿を現わします。「エルサレム」(イエルー・シャーライム)とは、神と人とが永遠に共に住むという神のご計画の究極的な象徴的語彙とも言えるのです。

3. ダビデとエルサレム

●ダビデとエルサレムの関係も、切っても切れない深いものがあります。ダビデが全イスラエルの王となって最初にしたことは、エルサレムを全イスラエルの政治的、宗教的な中心地とすることでした。ダビデはそこにモーセの幕屋の至聖所にあった「契約の箱」を運び込みました。これがダビデの幕屋と呼ばれるものです。ダビデが王となってからダビデの子が神殿を建てるまでのわずか 40 年間ほど、エルサレムの小高い山(シオン)に、その「契約の箱」は安置されました。

●エルサレムは地理的に考えるならば、自然の要害である以外は特別なものは何もありません。しかし他のどの町にもない特徴がこの町にはあるのです。それは、神が住まわれる場所として神が選ばれたということです。詩篇 132 篇 13～14 節には、「**主はシオンを選び、それをご自分の住みかとして望まれた。『これはとこしえに、わたしの安息の場所、ここにわたしは住もう。わたしがそれを望んだから。』**」とあります。ダビデがエルサレムを選んだように見えますが、この詩篇によれば、主がそこを選び、そこを地上におけるご自分の住みかとして望まれたゆえに、ダビデがそこを都としたと考えられます。その逆ではないことは明らかです。

●ちなみに、「シオン」は「エルサレム」の雅名です。日本のことを「大和(ヤマト)」と言うのと同じです。「エルサレム」という語彙は、旧約で 977 回、新約では 140 回使われています。合わせると何と 1117 回も使われているのです。一方、エルサレムの雅名である「シオン」は、旧約で 161 回、新約では 7 回。合わせると 168 回です。「**エルサレム(シオン)は、神のヴィジョンの中心地**です。エルサレム(シオン)は、やがてダビデ契約の成就として地上再臨されるメシア(キリスト)によって実現するメシア王国(千年王国)、ならびに新しい天から新しい地に降りてくる「新しいエルサレム」が置かれる永遠の御国の中心的な場所でもあり、主にあるすべての者たちがやがて行くところでもあります。

●詩篇 132 篇 13～14 節のみことばをもう一度よく観察してみましょう。

「主はシオンを選び、それをご自分の住みかとして**望まれた**。『これはとこしえに、わたしの安息の場所、ここにわたしは住もう。わたしがそれを**望んだ**から。』」

ここには「望まれた」「望んだ」という動詞が二回も使われています。この動詞はヘブル語の「アーヴァー」(אָוַר)です。ヘブル語の「アルファベット(正確には「アーレフベート」)」にはそれぞれ数値があります。つまり、ヘブル語の最初の文字である「アーレフ」の数値は「1」です。二番目の「ベート」の数値は「2」、というように。その数値の組み合わせに実は隠された意味があるのです。文字を数値に置き換えることを「ゲマトリア」と言いますが、先の「望まれた」の「アーヴァー」(אָוַר)を数値に置き換えてみると、**1+6+5=12** となります。この数に10を掛けると **12×10=120** で主の望みは完璧となります。というのは、聖書における10という数字は「高める、拡張する」を意味するヘブル語動詞の「ガーヴァー」(גָּוַר)のゲマトリアと同数だからです。ゲマトリアは一見まゆつば的な印象を与えますが、神の世界は私たちが想像する以上に、完璧な数学の世界でもあるのです。このことはこれくらいにしておきますが、詩篇 50 篇 2 節に、「**麗しさの窮み、シオンから、神は光を放たれた。**」というフレーズがあります。「麗しさの窮み」=「シオン」という図式です。特に、「**窮み**」ということばは、「完全、極致」を意味するヘブル語の「ミフラル」(מִפְּלָל)です。そしてこの語彙のゲマトリアは **40+20+30+30=120** です。つまり、主の「完全な望み」と麗しさの「窮み」のゲマトリアが同数だということです。これは神の秘密が数字の中に隠されていることを意味しています。つまり、**主がご自分の住みかとして「望まれたシオン」は、神にとって麗しさの「窮み」だということです。**「麗しさの窮み、シオン」は、この地上で唯一、神ご自身が選ばれ、望まれた唯一の完璧な場所なのです。いわば、「シオンは麗しき神のヴィジョンが完成するところ」であり、永遠の御国の中心地であることを聖書が証言しているということなのです。ダビデはそこを選んだことで、アブラハムとつながるのです。

4. イエシュアとエルサレム

●御父から遣わされた御子イエシュアもエルサレムと深いかわりがあります。御子イエシュアがこの世に遣わされたのは、人々を神に立ち返らせ、御国の福音の完成が近づいていることを信じさせるためでした。と同時に、御子は神のしもべとして人間の罪の贖いのために、エルサレムにおいて十字架の死を引き受けるためでした。ルカの福音書 9 章 51 節にこう記されています。

さて、天に上げられる日が近づいて来たころ、イエスは、エルサレムに行こうとして御顔をまっすぐ向けられ(た)。

●「エルサレムに行こうとして御顔をまっすぐ向けられた」とありますが、イエシュアの御顔がエルサレムに固定されたという意味です。「御顔」は「顔」という意味ではなく、「主ご自身」を意味する旧約的表現です。イエシュアは自分がエルサレムに行くべき目的をはっきりと意識されたという意味でもあります。なぜなら、エルサレムは神のヴィジョンが完成される場所だからです。ルカ 9 章 51 節は、アブラハムとイサクがモリヤの地にある一つの山(=エルサレム)に向かって「いっしょに進んで行った」ように、御子が御父と同じヴィジョンを実現するために、エルサレムに向かって行く決意を今一度新たにされたと解釈できる表現です。

●ちなみに、9 章 51 節を境にして「それ以前」と「それ以降」の二つの区分に分けられるのは、ルカの福音書の構成の特徴です。9 章 51 節までは、主に「ガリラヤにおけるイエシュアの活動」(4:14~9:50)が記されており、9 章 51 節以降は「エルサレムへの旅路」(9:51~19:27)と「エルサレムにおけるイエシュアの活動」(19:28

～21:37)と「エルサレムでの最後の晩餐と受難」(22:1～23:56)、そして「復活、昇天」と、すべて「エルサレム」を中心としています。そして再びこのエルサレムに来られる時には、イエシュアは王なるメシアとして来られます。その来られる場所が、**エルサレム**(正しくは「エルサレムの東側にあるオリーブ山」)なのです。

ベアハリート

●マタイの福音書の冒頭にある「アブラハム」「ダビデ」「イエシュア」の三人の名前に共通する事柄とは何かという問いかけの答えは「エルサレム」でした。これまでそのことを論証してきたのですが、この論証の土台にあるのは神の永遠のご計画(マスタープラン)です。神のマスタープランにおいて、エルサレムは極めて重要な位置を占めています。換言するなら、エルサレム(イェルー・シャーライム)こそ、神のマスタープランを正しく理解する鍵語であるということです。決して「エルサレム」を「教会」に置換して理解してはならないのです。文字通り、神のヴィジョンが実現される場、永遠の神の都としての「エルサレム」として理解される必要があるのです。このことを常に念頭に置くとき、イエシュアの伝えた「御国の福音」の啓示が開かれ始めると信じます。

※注 「エルサレム」の名称についてのもうひとつの解釈

●ユダヤ人のラビの一人、アブラハム・ヨシュア・ヘシェル氏の「主の山にヴィジョンあり」という訳に出会うまで、私は「エルサレム」についての意味を以下のように解釈していました。その解釈はヘシェル氏の訳の援用的解釈として用いることができると思います。

●「エルサレム」という言葉は、ヘブル語で「イェルーシャーライム」と言いますが、この言葉は二つのことばから成っています。一つは「イェル」(יְרֻ?)、もう一つは「シャーローーム」(שָׁלוֹם)です。「イェル」(יְרֻ?)は、「ヨッド」(יְ?)と「レーシュ」(רֶ?)の組み合わせですが、「ヨッド」は神の力ある御手を表わし、「レーシュ」は「頭、思考、考え、ご計画」を表わします。つまり、この二つが「神のご計画(考え)」を意味し、この語彙がもう一つの文字を伴うことで、いろいろな意味を持つようになります。

●たとえば、「神のご計画(考え)」が、

- ①「(高い所から)降りて来る、下る、低くされる」という意味の「ヤーラド」(יָרַד?)
- ②「投げる、(矢を)射る、教える、指し示す、(隅石)を置く、土台を据える」という意味の「ヤーラー」(יָרָה?)
- ③「所有する、占領する」を意味する「ヤーラシュ」(יָרַשׁ?)

●以上のような意味合いをもった存在を「イェル」(יְרֻ?)で表わしていると考えられます。そして後者の「シャーライム」(שָׁלוֹם)は「平和」を意味する「シャーローーム」(שָׁלוֹם)の複数形です。複数形は二倍の平和を表わし、「エルサレム」は町(都)の中でも長子的地位を有しているとも解釈できますし、ヘブル語の「シャーローーム」はあらゆる領域における神の祝福の総称とも言えます。つまり、平和、和解、繁栄、健康、知恵、心の安らぎ、勝利といった神の祝福を意味しています。従って「**エルサレム**」とは、神のご計画をもった方が、高い所から降りて来て、神のあらゆる祝福(シャーローーム)を据える場所として、神が占領する(支配する)ところという意味になります。このことがこの地上に実現するのは「千年王国」(メシア的王国)においてであり、その時までは、この地に真の平和は訪れることはないと言えるのです。ですから、「主よ。来てください。」「御国が来ますように」という祈りが真実味を持つのです。